



大阪中之島美術館 2026年展覧会のお知らせ

このたび、大阪中之島美術館で2026年に開催する展覧会のラインナップが決定しましたのでお知らせします。
なお本リリース以外の展覧会が決定次第、隨時お知らせいたします。

拡大するシュルレアリスム
視覚芸術から広告、ファッション、インテリアへ
2025年12月13日（土） - 2026年3月8日（日）

サラ・モリス（仮称）
2026年1月31日（土） - 4月5日（日）

没後50年 高島野十郎展
2026年3月25日（水） - 6月21日（日）

驚異の部屋の私たち、消滅せよ。
- 森村泰昌・ヤノベケンジ・やなぎみわ -
2026年4月25日（土） - 6月28日（日）

カール・ヴァルザー展（仮称）
2026年7月4日（土） - 9月27日（日）

NHK日曜美術館 50年展
2026年10月10日（土） - 12月20日（日）

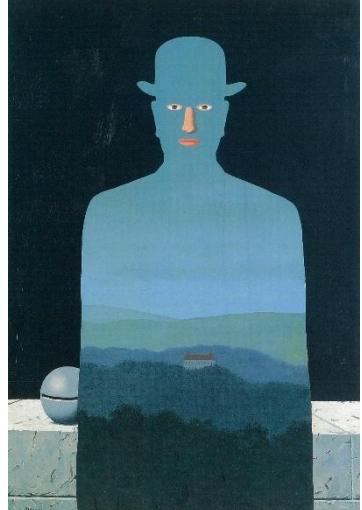
大英博物館日本美術コレクション 百花繚乱～海を越えた江戸絵画
2026年10月31日（土） - 2027年1月31日（日）



拡大するシュルレアリズム
視覚芸術から広告、ファッション、インテリアへ
会期：2025年12月13日（土）- 2026年3月8日（日）

1924年にアンドレ・ブルトンが定義づけた動向であるシュルレアリズム（超現実主義）は、無意識や夢に着目した、フロイトの精神分析学に影響を受けて発生しました。当初は文学における傾向として起こったものですが、徐々にその影響は拡大し、オブジェや絵画、写真・映像といった視覚芸術をはじめ、広告やファッション、インテリアへと幅広い展開をみせました。芸術的革命をもたらしたシュルレアリズムは、政治的要素をも内包する一方、日常に密接した場面にも拡がりをみせ、社会に対して政治、日常の両面からアプローチしたといえます。圧倒的存在感をもって視覚芸術、ひいては社会全体へと拡大したシュルレアリズムを、表現の媒体をキーワードとして解体し、シュルレアリズム像の再構築をめざします。

【主催】 大阪中之島美術館
【会場】 大阪中之島美術館 4階展示室



ルネ・マグリット 《王様の美術館》
1966年 横浜美術館

本展の詳細はオンラインプレスリリースをご覧ください。
オンラインプレスリリース：<https://www.artpr.jp/nakka-art/surrealism-2025>

サラ・モリス（仮称）
会期：2026年1月31日（土）- 4月5日（日）

ニューヨークを拠点に活動するアーティスト、サラ・モリスは、大都市の風景を平面へと変換した抽象絵画や、それを建築的に展開させたパブリックアート、都市の生態を切り取った映像作品など、多岐にわたる創作活動を続けています。これらの作品は、華やかな都市生活に隠された政治経済といった社会構造を表しています。大阪中之島美術館は、サラが2018年に大阪を舞台に制作した映像作品《サクラ》と、その撮影にインスピライアされた絵画作品《サウンドグラフ》シリーズ等を収蔵しています。本展はこれら近作にくわえ、彼女の代表作である都市名を冠した幾何学的な絵画や初期作品、これまでの映像作品を一堂に紹介します。本展は、サラ・モリスの日本初の美術館での回顧展としてふさわしい充実したものと言えるでしょう。

【主催】 大阪中之島美術館
【会場】 大阪中之島美術館 5階展示室



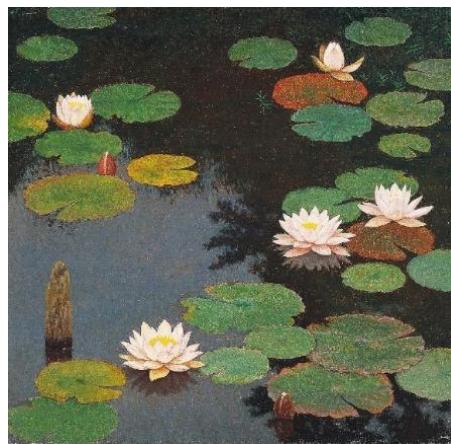
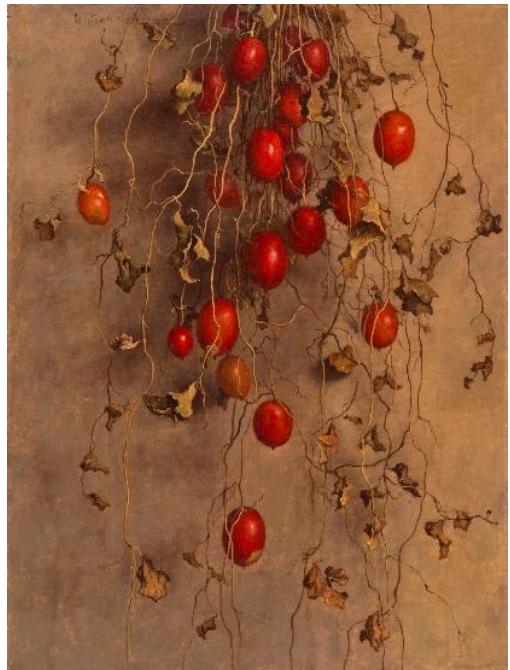
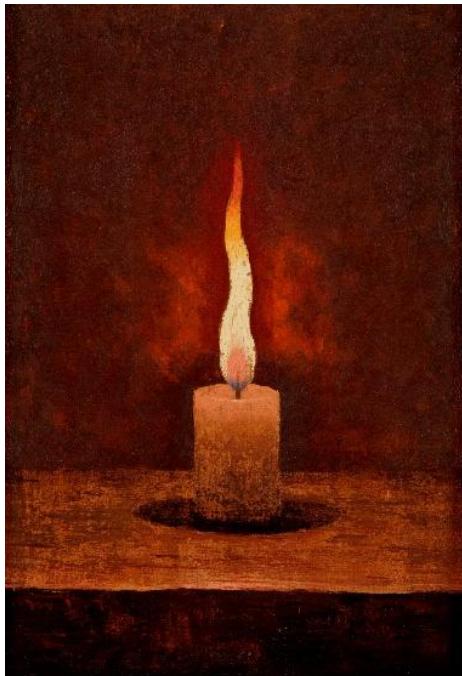
サラ・モリス 《社会は抽象的であり、文化は具体的である【サウンドグラフ】》2018年
家庭用アクリル塗料 キャンバス 214 x 428 cm 大阪中之島美術館
© Sarah Morris



没後50年 高島野十郎展

会期：2026年3月25日（水） – 6月21日（日）

高島野十郎（1890 – 1975）は、「蠟燭」や「月」などを独特の写実的筆致で描く福岡県久留米市出身の洋画家です。没後50年の節目に開催する本展は、代表作はもちろんのこと、初公開も含めた約150点を展示する過去最大規模の回顧展で、大阪では初めて開催されます。「孤高の画家」と呼ばれてきた野十郎の芸術が形成されたルーツを遡り、青年期や滞欧期の作品など、従来の展覧会ではそれほど大きく取り上げられることができなかった部分にも焦点を当て、その芸術の真髄に迫ります。



左上：《蠟燭》 大正時代(1912-26)

右上：《からすうり》 昭和10(1935)年

左下：《睡蓮》 昭和50(1975)年

すべて高島野十郎、福岡県立美術館

【主催】 大阪中之島美術館、毎日新聞社

【会場】 大阪中之島美術館 4階展示室



驚異の部屋の私たち、消滅せよ。 — 森村泰昌・ヤノベケンジ・やなぎみわ —

会期：2026年4月25日（土）- 6月28日（日）



「関西ニューウェーブ」を代表する森村泰昌、ヤノベケンジ、やなぎみわが大阪中之島美術館に集結！国際的に活動しつつも一貫して「カンサイ」を拠点とし、時に交錯してきた彼らが、2026年、万博のポストイヤーに再び邂逅します。なぜこの3人が集まるのか。そのタイトルは何を意味するのか。さらには、「消滅せよ。」という言葉の先には何があるのか。新作を中心に構成される本展は、同時に作家それぞれのこれまでの活動が凝縮された「驚異の部屋」となります。ときに協働し、ときに衝突しながら、絶対的に孤独な表現者として個々の作品世界を美術館という舞台でぶつけ合います。美術とは何かという根源的な問いに立ち向かう3人が、展示室をひっくり返す——そんな関西アートシーンのクライマックスがここに開幕します。

左 メインビジュアル
左下 森村泰昌
中央下 ヤノベケンジ
右下 やなぎみわ



【主催】 大阪中之島美術館、読売新聞社

【会場】 大阪中之島美術館 5階展示室



カール・ヴァルザー展（仮称）

会期：2026年7月4日（土）－ 9月27日（日）

カール・ヴァルザー（1877 – 1943）は、20世紀のスイスの美術家です。スイスのベルン近郊の町ビール（ビエンヌ）に生まれ、20歳代よりドイツのベルリンに滞在し、同地で当時最先端の美術団体であったベルリン分離派に加わります。その一方、演出家マックス・ラインハルトのもとで舞台美術を手がけ、弟で文筆家のローベルト・ヴァルザーの著書に挿絵を描くなど、多方面で活躍しました。後半生は祖国スイスに居住し、壁画や室内装飾で評価を高めます。1908年には日本を旅行し、京都の宮津をはじめ日本各地の風景や風俗を描いています。本展は日本初の個展として、初期の象徴主義的な油彩画から晩年まで、日本での作品を含めて、広くその画業をご紹介します。



左上：《婦人の肖像》 1902年

ゴットフリート・ケラー財団（新ビール美術館寄託）

右上：《少女と、人形の乳母車》 1905年以前 新ビール美術館

左下：《森》 1902-1903年 新ビール美術館

右下：《歌舞伎女形（傾城阿古屋）》 1908年 ベルン美術館

© Kunstmuseum Bern

すべてカール・ヴァルザー

【主催】 大阪中之島美術館

【会場】 大阪中之島美術館 4階展示室

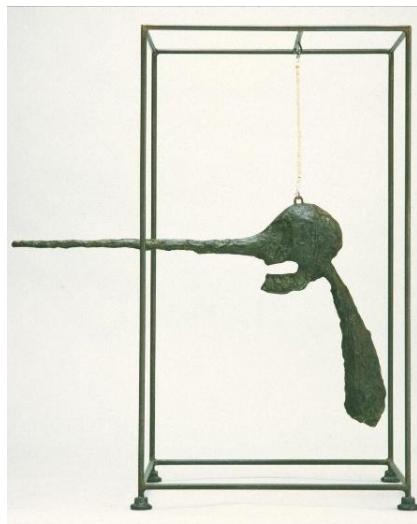


NHK日曜美術館 50年展

会期：2026年10月10日（土）～12月20日（日）

NHK「日曜美術館」は、1976年の放送開始から2000回を超える長寿番組です。2026年に50年を迎えるにあたり、番組のこれまでの歩みと、登場した美の魅力を伝える展覧会を開催します。

本展では、古代から現代美術に至るまでの、番組を彩ってきた数々の名作・名品を、5つの章でご紹介します。あわせて、番組の出演者たちがつむいできた時代を超えて響く言葉も、過去の放送から厳選して上映します。さらには、最新技術で可能となった高精細映像も組み合わせて、美と人を繋いできた「日曜美術館」の歴史をご覧いただけます。



左上：アルベルト・ジャコメッティ 《鼻》

1947年 大阪中之島美術館

右上：松本俊介 《鉄橋近く》 1944年

岩手県立美術館

下：伊藤若冲 《石燈籠図屏風》六曲一双

右隻 18世紀 京都国立博物館

*半期展示

【主催】 大阪中之島美術館、NHK大阪放送局、NHKエンタープライズ近畿

【会場】 大阪中之島美術館 5階展示室



大英博物館日本美術コレクション 百花繚乱～海を越えた江戸絵画

会期：2026年10月31日（土）～2027年1月31日（日）

1753年に開館した大英博物館は、世界を代表するミュージアムのひとつです。同館の日本美術コレクションは、海外では最も包括的と評されるほど量・質ともに充実しています。そのコレクション形成を支えてきたのは、ジャポニスムが流行した19世紀末以来、海を隔てた異国之地・日本の文化に魅了された人々でした。数々の収集家や学芸員が築いたつながりは、国境や時代を越えて広がり、今日まで受け継がれています。

本展では、4万点に及ぶ同館の日本美術コレクションから、喜多川歌麿の貴重な肉筆画「文読む遊女」や円山応挙「虎の子渡し図屏風」、葛飾北斎「万物絵本大全」挿絵素描など、日本初出品を含む江戸時代の屏風、掛軸、絵巻の絵画作品と、歌麿、写楽、北斎、広重など代表的な8人の浮世絵師による版画を中心に、優れた作品を厳選してご紹介いたします。



左：喜多川歌麿 《文読む遊女》 1805-1806年

右上：円山応挙 《虎の子渡し図屏風》 1781-1782年

右下：葛飾北斎 《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》 1831年

すべて 大英博物館 © The Trustees of the British Museum 2026

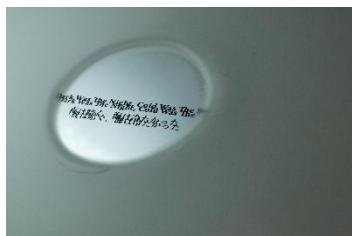
【主催】 大阪中之島美術館、大英博物館、朝日新聞社、NHK大阪放送局、NHKエンタープライズ近畿

【会場】 大阪中之島美術館 4階展示室



Osaka Directory Supported by RICHARD MILLE

4年目となる2025年度は、金 光男（1987年、大阪府生まれ、三重県在住）、天牛美矢子（1989年、大阪府生まれ、大阪府在住）、和田真由子（1985年、大阪府生まれ、大阪府在住）の3名をご紹介します。各展覧会の詳細については、それぞれ開催の約2カ月前にお知らせする予定です。



Osaka Directory 10 Supported by RICHARD MILLE 金 光男

2025年11月15日（土） - 12月14日（日）

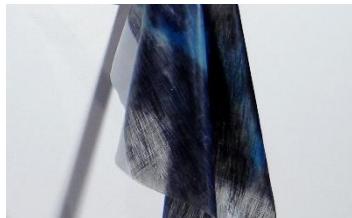
金 光男 本展のための参考画像 2025年



Osaka Directory 11 Supported by RICHARD MILLE 天牛 美矢子

2025年12月20日（土） - 2026年1月18日（日）

天牛美矢子 作品のためのドローイング（部分） 2025年



Osaka Directory 12 Supported by RICHARD MILLE 和田 真由子

2026年1月24日（土） - 2月23日（月・祝）

和田真由子 《つばめ》（部分） 2010年

【主催】 大阪中之島美術館、公益財団法人 関西・大阪21世紀協会

【Supported by】 RICHARD MILLE

【協賛】 サントリーホールディングス株式会社、ロート製薬株式会社、西日本電信電話株式会社、ダイキン工業株式会社、株式会社丹青社、株式会社モンベル、株式会社エキスプレス、京阪ホールディングス株式会社

【会場】 大阪中之島美術館 2階多目的スペース

【料金】 入場無料

「Osaka Directory Supported by RICHARD MILLE」について

「Osaka Directory Supported by RICHARD MILLE」は、大阪中之島美術館が関西・大阪21世紀協会と共同で主催する、関西ゆかりの若手作家を中心に個展形式でご紹介する展覧会です。これからの時代を象徴する、新たな表現を生み出す作家を紹介していきます。ディレクトリとは、IT用語でデータを整理し分類するためのフォルダ等を意味します。本シリーズを通して、将来活躍が期待される関西の若手アーティストの情報を美術館というディレクトリに格納、保管し、さらに、ここ大阪中之島美術館から彼らの活動を広く世にご紹介し、世界に羽ばたくことを支援していきます。



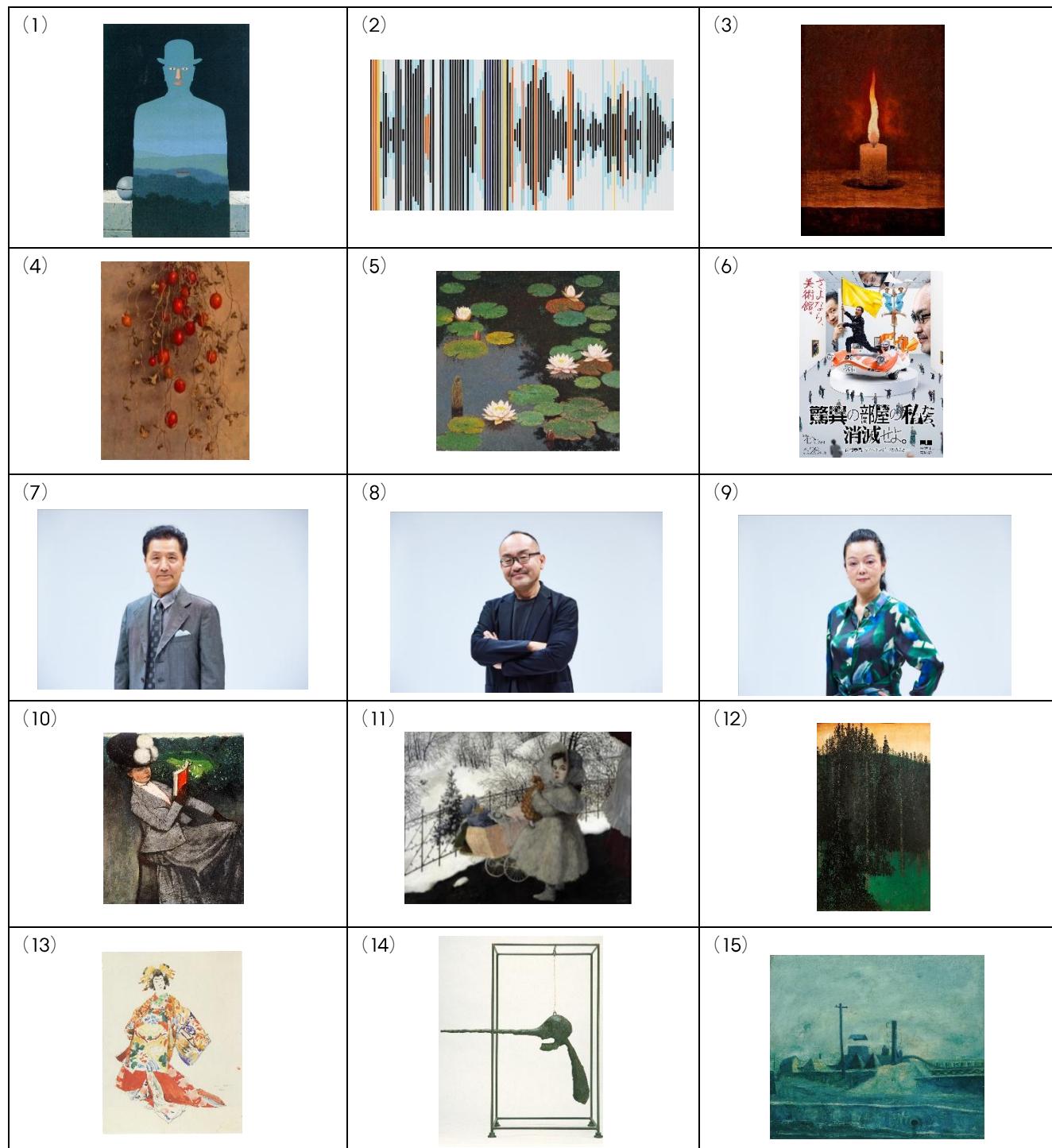
広報用画像一覧

本展の展示物等の画像を、広報素材としてご提供いたします。下記申し込みフォームよりお申し込みください。

[広報用画像申込フォーム]

<https://forms.gle/4jhg2Ad8gaLjuJ4R8>

■ 広報画像をご使用の際は、「画像使用全般に関しての注意」を必ずご確認ください。





[広報用画像クレジット一覧]

*太字は記載必須のクレジットです。

No.	クレジット・作品名・年代・キャプション
1	ルネ・マグリット 《王様の美術館》 1966 年 横浜美術館
2	サラ・モリス 《社会は抽象的であり、文化は具体的である【サウンドグラフI】》 2018 年 家庭用アクリル塗料 カンヴァス 214 x 428 cm 大阪中之島美術館 © Sarah Morris
3	高島野十郎 《蝋燭》 大正時代 (1912-26) 福岡県立美術館
4	高島野十郎 《からすうり》 昭和 10(1935) 年 福岡県立美術館
5	高島野十郎 《睡蓮》 昭和 50(1975) 年 福岡県立美術館
6	メインビジュアル *クレジット不要
7	森村泰昌 *クレジット不要
8	ヤノベケンジ *クレジット不要
9	やなぎみわ *クレジット不要
10	カール・ヴァルサー 《婦人の肖像》 1902 年 ゴットフリート・ケラー財団（新ビール美術館寄託）
11	カール・ヴァルサー 《少女と、人形の乳母車》 1905 年以前 新ビール美術館



12	カール・ヴァルサー 《森》 1902—1903 年 新ビール美術館
13	カール・ヴァルサー 《歌舞伎女形（傾城阿古屋）》 1908 年 ベルン美術館 © Kunstmuseum Bern
14	アルベルト・ジャコメッティ 《鼻》 1947 年 大阪中之島美術館
15	松本俊介 《鉄橋近く》 1944 年 岩手県立美術館
16	伊藤若冲 《石燈籠図屏風》六曲一双 右隻 18世紀 京都国立博物館 *半期展示
17	喜多川歌麿 《文読む遊女》 1805-1806 年 大英博物館 © The Trustees of the British Museum 2026
18	円山応挙 《虎の子渡し図屏風》 1781-1782 年 大英博物館 © The Trustees of the British Museum 2026
19	葛飾北斎 《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》 1831 年 大英博物館 © The Trustees of the British Museum 2026
20	金 光男 本展のための参考画像 2025 年
21	天牛美矢子 作品のためのドローイング（部分） 2025 年
22	和田真由子 《つばめ》（部分） 2010 年

画像使用全般に関する注意

- ・展覧会広報目的での使用に限ります。使用可能期間は対象展覧会の会期終了までです。
使用後はデータの破棄をお願いいたします。
- ・画像の二次使用はご遠慮ください。
- ・画像への文字載せ、大幅なトリミング、色調の改変はご遠慮ください。
- ・展覧会名、会期・会場名のほか、画像の使用時にはキャプション・画像クレジットを必ずご掲載ください。
- ・概要など確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で広報事務局までお送りいただきますようお願いいたします。
- ・掲載・放送後は、お手数ですが、掲載誌・同録DVDを広報事務局へ1部ご送付ください。
またWEB媒体の場合は、掲載URLをお知らせください。

*読者プレゼント招待券の提供が可能です。最大：2組4枚